生田に宿す（菅茶山）

千歳恩讐兩不存 風雲長爲弔忠魂
客窓一夜聽松籟 月暗楠公墓畔村

千歳 恩讐 兩つながら 存せず

解説 茶山がかつて湊川に近い生田村に回り、楠公墓畔のさびしさに深く心を痛め、後日それを追憶して作った詩。

風雲 長えに 為に 忠魂を 弔う

語釈 ※生田一三三六年、楠木・新田の連合軍が足利尊氏の軍と戦った湊川にあった村。※千歳一長い年月。※恩讐一敵と味方。*忠魂一忠義な人の魂。楠公の魂。*客窓一旅館の窓。*松籟一松風の音。*墓畔村一生田をいう。

客窓 一夜 松籟を 聴く

月は 暗し 楠公 墓畔の 村

解説 長い年月を経た今となっては、敵も味方も消えて跡形もない。ただ風雲がただよい、忠義のために戦死した楠公のみたまを永遠に弔っているばかりである。私は旅の夜をここに過ごし、松風の音を耳にしながらか窓からあなたを見渡すと、月も暗く、楠公墓畔の村は、何とも寂しい限りであった。